て幽囚の身となりたる(之をバビロニア幽囚といふ)以來、約七千年の間法王の世代は屢變したるも、何れもフランス王家の操り人形となり(後にはオーストリア家に操縱せられぬ)、昔時の威嚴權力は其痕を止めず。ベネヂクト十二世の如き破門の皇帝バワリア家のルイの使節に向ひ、潸然涙を揮て其の處置の本心に出てず唯フランス王の意に反せば、廢位の憂忽ち至らんことを恐るゝに由るのみなるを陳辯せりといふ。かくて法王も今は其の野心を遂げんには權力よりも財力に依るの捷徑なるを察し、アヴイニオンの法王は汲々として黄金の蓄積と僧侶に對する課税を始め、ジオン二十二世の如き主なき寺領より一年分の收入を徴集しければ、さらぬだに法王のローマに在らず單に使節の駐在に止まるを怒れるイタリー人は、一三七八年、グレゴリー十一世の死を機としイタリー生れのバリー大僧正を擁立して位に即かしめたり。是をウルバン六世といふ。しかるに此の事件は頗るフランス人を激せしめければ、法王及び其の從屬者の漸く自由を得るや間もなくフランス人及び一部のイタリー人は、ゼネバのカーヂナルにしてフランス出身の法王なるクレメント七世を擁立し、ヨーロッパに於て同時に二人の法王現出し西方教界の大分裂を來し、イングランド、ドイツ、ハンガリー、ボヘミア、ホルランド及びイタリーの大半はウルバンを贊け、フランス、スペイン、スコットランド、サヴオイ、ロルレインはクレメントに味方せり。斯の如き現象は基督教界未聞の事に屬するを以て何れも熱心仲裁の勞を採らんとし特にバリー大學の如きは殆ど熱狂的運動を試み三議を提出して兩者を調停せんと欲せしも成らず。斯かる際にクレメント七世死せしかば其の黨與は急ぎスペインルナの人ベネヂクト十三世を立て(一三九四)毫も調停の議を聽かず。其後を繼げるボニフエース九世、インノセント六世グレゴリー十二世、皆同一の態度を執りて屈せざりき。

宗教大改革の先驅及びピサ、コンスタンス、バゼルの會議。

法王一度アヴイニオンに移りてより、反法王の氣風處在に起り。十四世紀の末期にはフランスにジャックエリー、マーセル、カボシーヌあり。フランダーには兩ヴアン、アルテヴエルド、イングランドにワット、タイラー、イタリーに、リエンツオ等あり。然れども彼等の運動は未だ充分なる手段を採るに至らざりき。又ジオン・ウイツクリフ、グレマニーのニコラス、ゲルソン等亦功なきに非ず。ゲルソン敬虔にして

忠愼なれども、頗る法王の機嫌を損じ、「基督の摸倣」の作者を以て擬せられたり。彼は其の著書に於てローマ宮廷數千の官吏は唯黄金獲得に汲々として維れ日も足らざるに、一人の起て眞理德義の傳播に從事するものなきを憤慨せりといふ。

ローマ、アヴイニオンの兩法王相爭ひてより敎界の混亂其の極に達しければ、ピサのカーヂナル會議(一四〇九)はベネヂクト、グレゴリーの兩法王を廢しアレキサンダーを撰立せしに、兩法王は退位を肯ぜず、同時に三人の法王西歐に出現し混亂は却りて以前に倍蓰せり。而して此會議に於て先づ決すべきは法王又は會議の中何れが優上の地位に立つ可きかの問題なり。而るに法王は三人共に皆宗敎會議の一般的性質を帶ぶるは其の參集人員の夥多なるにあらずして、法王の出席すると否とに依り決すべきものなるを論じ、ガリア派敎會の首領ゲルソンは此の法王の說を排し、先づ敎界を二種に分ち、一般敎界はギリシア人、野蠻人、男女貴族平民貧者富人等其の身分如何を論ぜず、一般に基督敎徒を悉く包含せるものにして其の爲す處に一の過誤なく一の侮辱を蒙るなきものを云ひ、使僧敎界は基督を首長とし法王カーヂナル、高僧、僧侶、國王、人民等其の階級如何を論ぜず悉く其の一員たり。

故に此の敎界には過誤羞辱分裂等の不祥なる現象續々現出すべく、畢竟一般敎界の器械たるに過ぎず。故に法王にして不適任ならば敎界は決して之を廢するに躊躇すべからず云々」。と之に續てジョン・ウイックリフは全ガソリック敎を倒さんとの意氣を以てカソリックの敎義特に其の變體說を攻擊して餘蘊なかりき。ジオン・フッス(ボヘミア人)はウイックリフ程極端に亘らざりしも猶ほ三大攻擊點を指摘せり。即ち基督敎の敎義は聖經を以て最も確實なる憑據とすべきこと、僧侶の生活を舊時の純潔に返へし之をして一切俗界に干涉せしめざること、僧侶の精神純潔、操行清廉の者に限り精神界の權力を准許すべきこと等を述べ、更に進て僧侶の纖侮聽問、偶像崇拜、及斷食等の不可なるを論じ、僧侶及び法王の宮廷を以て其の罵詈の對象とし、「淸僧の憎惡」及び「非基督敎者」の二書を著はして其の所說を公にせり。法王アレキサンダー五世のピサ宗敎會議解散後、繼嗣ジオン二十三世は輿論とドイツ皇帝シギスムンドの勸告に基づき、一四一四年ピサに第二回宗敎大會議を開きぬ。來り會する者僧正、長老、諸國君主の使節諸大學の委員、下級神學者の一團法學博士等あり。皇帝シギスムンド數々會長席に就き投票は頭數の多寡

によらずして英佛獨伊の四國民各一票を有することに決し、溫和黨に便宜を與へければ、極端なる法王黨及ひ改革黨は共に會議の擯斥を受けたり。而して會議の結果としては新にマルチン五世を法王に選びグレゴリー七世は位を避れ、ベネデグト八世及びジオン二十三世は共に免職となりければ一四一七年教界の分裂も一旦中止となれり。爾來宗教大會議は定期に開會すること、僧侶の修養及び生活狀態に大改革を加ふるに決せしも、法王マルチン五世は決議の實行を避け一四一八年未だ其の結果の顯はれざるに先ちて會議の解散を宣言しぬ。其の後十餘年を經一四三一年に至り法王イウゼニウス四世はバゼルに宗教大會議を開きけるが、會議はコンスタンス會議の決議に則らんことを主張し、會議の解散は必ず議員三分の二の同意を要するを論じぬ。是に於て法王は議場を初めフエララに、後フロレンスに移せしも出席者極めて少く、多數はバゼルに止まり一四四三年迄繼續し且つイウゼニウスを廢しサヴオイ公フエリックス五世を法王とせり。斯くて兩法王黨は火花を散らして爭ひ教界の分裂は一四四八年フエリックス五世の讓位の際迄繼續せり。斯の如き狀態にて中世紀の間に全ヨーロッパを蔽ひたる教界の勢力全く地に墜ち混亂紛擾相繼て起れり。此の悲況を修め他日の活動を計らんとする者無きに非ざりしも、修養生活の狀態以前よりも一層墮落しければ遂に第十六世紀に於ける大改革を喚起するに至りたるは是非なき次第なり。

第七章　國民的文學及び中世の新發明

イタリー及びフランスの文學　中世紀の盛時には智力的生活は全く宗教團躰に限られ、其の用語もラチン語主として用ゐられ啻に教會のみならず普通語としても亦行はれたり。而も其の末期には諸國の人民の個人主義は漸く著しく且つ其の言語の中にも一種の訛を生じ、啻に一般人民のみならず文學上の用語としても亦用ゐられラチン語の用漸く廢れたり。而も中世紀の盛時に於て既にイタリーは商工業及び政治上著しき發達を遂げければ、從てイタリー語も最も長足なる進歩を遂げ、ダンテの崇高凄婉なる、ペトラルクの優雅なる、ボッカチオの奇拔なる詩調は蓋其の最も發達したる極致を表現せるものといふを得べし。而るにフランスの文學はイタリー文學の如く早くより完全の域に達することな

く、ダンテ、ペトラルクの如き皆ヴァーヂルを學び之を祖述せるが如き形跡ある處尠からざるも、フランス文學の祖たるジオアンヴィル、フロアサーの如きは皆師事する處なく、寧ろ獨力を以て文學界を開拓せるものなり。ジオアンヴィルの散文は其の長處にして筆鋒鋭利叙事簡明を以て著はれ、フロアサーは其の更に完全の域に達せるものなり。其の文躰の優雅にして描寫に巧なる、到底當時に其の四傳を求むるを得ず。其の着色の新鮮にして自然なる其の情緒の濃密にして穩健なる、皆以て優に百代の珍とするに足る。彼は一三三七年ヴァレンシアンに生れ、僧侶として諸方の城廓を歴問し所謂ヴルーヴェールの狀態なりしが、時恰もイングランド、フランスの二國戰正に酣にして兩國の騎士各豪華を競ひ暇あれば武技を事とせる際なれば、彼も亦此の間に出入し嚴正にして批判的なる歴史よりも寧ろ衆華爛熳たる時世の描寫に心血を注ぎぬ。彼の手に成りたる年代記は一三二六年より一四〇〇年に亘り、續て「クリスチン・ヴ・ピサンは「チャールス五世の歴史」を著はし、アレーン・シアチエーは「チャールス七世の歴史」並に「ル・クアヅリローグ・アンヴェクチーフ」を公にせしが、二人共に博學洽聞にして古事に精通し、殊にシャーヂエーの如きは文脈一致、用意周匝にして苦心慘憺一言一句も之を忽にせず、所謂咳唾珠を成せるものにして、後世バルザックの僅に之と比肩し得るに足るあるのみ。

又此頃現今演劇舞臺の濫觴たる小演臺の上に立ち、多數の觀客判定者の群集せる中にて「宗教秘密祭」を行ひ、聖經を俗語に譯したる上更に之を舞臺の動作に上すこと行はれたり。蓋し是より先き諸生がラチン、イタリー等の諸語を以て記載せる問答を教會の歩廊中に吟誦せしこと多分其の起原となりしならん。斯くて時代の進むに從ひ是等の嚴正にして問答躰なる演戯漸衰へ、奇怪無雜なる分子を含有せる演戯は、數十人の奏樂に合せて盛に行はれたり。而して斯の如き神聖なる事蹟を演ずるの特權も次第に俗人の手に移り、市民相結びて博愛社を起し、フランス王チャールス六世の如き一四〇二年特許狀を與へて其の設立を許しければ、市民は直に宗教的演劇を擧行せしに大に好結果を奏し日曜日毎に觀客堵をなし盛況比なし。かく宗教演劇の發達と共に批判的譏笑的性質を帶びたる喜劇も漸く行はれ、國王フイリップ・ブェアーの組織せる法廷の書記之を作りしが、十五世紀の頃にはフランスの喜劇は益盛にして遂に「ラヴォカート・パッラン」と稱する有名なる

滑稽狂言の一大傑作を出すに至れり。然るに社會組織の革命及道德の頽廢を以て特徴とせる中世紀の末期に一のフランス文の傑作見えざるは素より怪むべきに足らざるも、アゼンクールに捕虜の身となりたるオルレアン家のチャールスの如きは優雅の口調を以て沈欝せる情緒を叙べ、無名の作者(或は云ふ、トーマス・アカムピ)の作なる「基督の模範」の如きは懐疑の念に苦しめられて懊惱堪ゆる能はざる、人類の精神の不可思議なる點を精叙せり。

北方文學(イギリス、ドイツ、スカンヂナヴィア語)　イングランドは中世時代に屢外國人の侵略を蒙りしが、所謂一種特有なるイギリス語を形るに至りしはヨーロッパの歴史中最も後れたるものゝ一なり。サキソン人、デーン人、ノーマン、フランク人等のイングランドを侵すや、其の國語も亦急轉直下の勢を以てイングランドを襲ひ、同一の土地に異りたる沙土を殘留して去れり。而してローマ帝國の滅亡後ローマ化したるケルト人を襲ひて、之を征服したるドイツ人種のイングランドに輸入したる言語はサキソン語にして之をイギリス語の根本語とす。續いてデーン人侵入の結果新に其の言語の之に加はりたるもの亦尠からざりしが、ノルマン王朝建設せらるゝに至りノルマン、フランス語の影響を受けて漸次變形を生じ、ケルト語の痕跡全く絶え、サキソン語を基礎としてフランス語の分子之に加はりたる新語を生じぬ。されど此の新語は未だ全國一般に行はるゝに至らず。國王を始めとして廷臣貴族等上流社會には一般にフランス語行はれ、フランス語はイングランドの公用語となり學校にても亦盛に之を用ゐたり。勿論ウイリアムの子孫はサキソン語を全く壓倒しフランス語のみを流行せしめんと努めたれども、サキソン人の頑强性は容易にフランス語に同化さるゝ事なく、斯かる間にノルマン分子とサキソン分子との間次第に舊時の抗敵心を捨て相融和するに至りしを以て、從て國語の上に於ても大影響を蒙り兩語相混和し玆に新にイギリス語を生ずるに至れり。而して此頃文法教師ジオン・コーンウォール、リチャード・ペンクライク等小學校に於ては必ずフランス語を捨てイギリス語を用ゐざる可からざることを主張しイギリス語の創成に與りて力ありき。且つ一三六二年エドワード三世は一の法令を發し、法廷には以後必ずイギリス語を用うべきを規定し、イギリス語は公用語としても亦用ゐらるゝに至れり。此頃より文學の方

面に於ても亦イギリス語の用漸次廣まりウイリアム・ラングランド「夢想」を著はして痛く當時の僧侶を攻擊し、詩人ゼオフレイ・チョーサーも亦「ツロイルス・クレシッダ」「名譽の家」「カンターベリー物語」を著はし、夥しく新熟語を用ゐ其の時代の狀態を實寫すること極めて精確に其間處々諷刺を交へたり。其の著書は百代英文學者の珍とする處なり。是と殆ど時を同じくして散文も亦起り、ジオン・ウイックリフの聖經飜譯サー・ジオン・モーンデヴイルの東方旅行記の飜譯共にイギリス語を用ゐたり。

ドイツ語は中世紀を通じて最も變化を受くること少く、偶々外國の侵入を受くることありとも用語に新分子を加うるが如き事なし。而も其の文學の發達の最も遲々たりしが如きは頗る怪むべしと雖も、其の文化常に他國よりも後れ且つヨーロッパの文明を受くること最も鈍き諸國の人民と交通せるが爲め、文學の發達を促すべき刺戟に乏しかりしを以てなり。シャーレマン帝以前の文學の遺物としてはウルフイラスの「ゴシック聖經」インドールの論說「ヅ・ナヂヴイタテ・ドミニ」の譯及びセント・ベオヂクト寺規則を飜譯せるもの等ありしが、シャーレマン帝の時に至り文學の方面は俄然生氣を生じヒルデブラントの歌の斷片の如き最も名あり。帝の死後ルイ三世(フランスの)北人擊退の歌及びルイ・ゼ・バイオスの命により著はされたる「福音の調和」と稱する歌の如き出で僅にドイツ文學の存在を世に示しゝが、オット大帝以後ホーヘンスタウヘン家の帝位相續に至る迄死滅の狀態にありき。而して第十四、第十五兩世紀頃に至りて韻文全く其の跡を絕ち、散文漸く盛大に赴かんとする傾ありしも未だ謂ふに足らず。戀愛詩人は皇帝貴族の何れよりも確實なる保護を得る能はず。唯商業貿易の利により次第に繁榮せる南部諸方の都府は之を奬勵するの傾ありしも、是とても充分なる成効を見るに足らず。唯南の方スイツルランドにては崇高なる情緒を漏らせる詩多く出で、ヴエイト・ウエベル、ジヤン・ヴイオル等の戰詩、ゼムバッハ役の史詩等も亦行はれ頗る人口に膾炙せり。ドイツの散文は素とカロリング朝の記錄及びフランスの稗史より脫化せるものにして主に世話物及び時代物小說として現はれけるが、其後法律及び說敎の類にも亦用ゐられ最も哲學的議論の表現には適當なるを示せり。其後第十四、五世紀頃には年代記編纂の業起り、リムブルグ、アルゼース、チユーリンギアに行

はれたり。要之中世に於けるドイツ文學は「ニーベルンゲン」の歌謠の外特徴とすべきものなく、是れすらイリアッドに比すれば數籌を輸せり。

スカンヂナヴイア文學は其の國語と同樣原とドイツの根原より出てたるものにて、基督敎渡來以前の遺物としては北方諸國の古歌ドイツ神學の純粹なる根原たるエッダスなり。渡來以後にはフランスの騎士的思想大に勢力を占め、其の影響を蒙りて出でたる作品には、ラグナー・ロッドブロッグの詩、ノルウエーのハコン王哀悼の詩、通俗の歌としては「フォルクヴイソー」の續き物あり。而して是に相當するものはデンマークの「バムペビソー」なり。是は戰詩と云はんよりは寧ろ史的敘事文とも云ふべきものにして、デンマーク語を以て古代の傳說を寫せるものにして、其の材料はフランス、イングランド、ドイツより藉りたる處少からず。十四世紀の初に至りノルウエー女王イウフエシアは大にフランス文學の輸入に努め、「サクソ・グランマヂコス」の著者は十二世紀の終末に「デンマーク史を著はして古代の傳說を集めたり。

スペイン及びポルトガルの文學

スペイン國のヨーロッパ諸國の進歩より離れて其の存在の自ら特立せる爲め、其の文學の根本を尋ぬればラチン種の第一流を占めたるに拘はらず其の衰頽復言ふに忍びざるものあり。素とスペインにては古代のケルト語(即ちイベリア語)、及びローマ人に征服せられたる人々のビユーニック熟語、勝利者たるアラビア人の用うる語等ありしも、何れもローマ人が半島征服後創定し、基督敎傳來後はヴイシゴス人の維持せるラヂン語に對し毫末の影響だも加ふるを得ず。アラビア人は假令侵略上の勝利者たりしも宗敎言語何れも之をスペインなる基督敎徒に强ゆるを得ざりき。唯半島北部の小諸侯の往々之を朝廷內に用ゐる者なきにあらざるも其の根據未だ固からず。實にスペイン國內基督敎徒の用ゐる語はラヂン語を基礎とし之に諸種の地方語を加へたるものなれども、カタローニア、ナヴアール、マジョルカ島にてはプロヴアンス語類似の語行はれぬ。カスチリア散文の最も有名なるは十三世紀にアルフオンソ・エル・ザビオの出版せる「シエト・パルヂダス」法典なり。スペインの政治的統一に熱心なるアルフオンソは政治上統一の階梯として熱心に科學的歷史的の著述にスペイン語を用ゐしめたり。スカスヂリアの詩を觀るに人民の絕えずムーア人

と戰ひ又內亂に苦める爲め、フランスに於ける如く立派なる詩を作るを得ざりしも、而も猶ほ短勁通俗的にして且つ國民的なる牌史を有せり。「シッド」は是等の種類に就き最も傑出せるものにして、スペインの騎士がムーア人と健鬪勇戰して毫も屈せざる氣象を描寫せるものなり。又「ロマンチエロ」は更に「シッド」を始め此の類の牌史を蒐集せるものなり。而して是等の中其の最も古きものは粗樸質朴の風を脫せざれども、其の文躰の完きと思想及び神話の醇化せられたるを見得べく、其の何れの部分にもスペイン人特有の急躁過激の調、名譽、愛情の強き發露を窺ふを得べし。斯くカスチール、アスチユリア、ヴアレンシア等がシッドの名譽を歌へる間に、アラゴン、カタローニア等はフランス南部の影響を受くると大なるを以て、プロヴアンス風の文學大に流行し、魔術の如き者頗る諸王族貴族の間に流行せり。されどプロヴアンス風の詩は間もなくアラゴンに滅び、カスチリアに於てのみ後來スペイン第一流の詩人を出すに至れり。即ち十四世紀にドン・サント・ラッビー出て、「普遍の踏舞」なる書を著はして「死」を論じ、尋てローブ・ヅ・ヴェガ及び「カルデロン」出て、縱橫其の戲曲的天才を振ひぬ。其他散文にては「エル・コンデ・ルカノー」の編あり。代々の宰相が其の君主に經綸の術を說きたるものを纂め「アヤラの年代記」はカスチール王兼アラゴン王たるピータ：猛烈と黑太子、デユ・ケズクランの間の關係を描寫せるものなり。

ポルトガル語はスペイン語と同樣ラヂン語と密接の關係を有し、或る點より云はゞラヂン語の方言といひ得べし。而してポルトガルが政治上スペインより獨立し一王國と成りたると同一の理由は、以て其の言語のスペイン語と分離せる理由の說明となし得べし。アラゴンと同樣ポルトガルの詩も其の源は「ヴルバヅール」に出て、バーガンヂー公ヘンリー此國を領するに及び勉めて之を紹介し、スペイン的精神よりも一層醇化したるポルトガル的精神を涵養し、スペインの「シッド」と相駢馳する「イネッヅ・ヅ・カストロ」を出せり。

古學研究の復興

上來述べたる如くヨーロッパの各方面に於て各國特有の國語を生じ以て其の國民の存在を明にせしが、近世の初期に至り古代の技術學藝は滔々として決河の如く各國の文學中に流入し、ヨーロッパ共通の思想を養ひ近世の智識統一の基を開けり。而して是等文藝復興運動は既に中世の末期より

始まり、ペトラルカ、ボッカッチオの如き輿りて最も力あり。ペトラルカは古代の遺物に對し熱心なる詮索を始め、殆ど一城一市を攻陷すると同樣の効力ある古文書古記錄の發見をなししが、一四一四年ボッヂオ・ブラッチオリニはサン・ガル寺の廢塔中よりクインチリアンの副寫ヴアレリウス・ブラックス、シリウス・イタリクスの著書の一部ルークレチウス等の十二喜劇集を、ロヂの僧正はチチエロの修辭論を發見せしが、其の他の所謂掘り出し物に至りては枚擧に遑あらず。是と同時にギリシアの諸敎授は東ローマ帝國の衰頽せし以來イタリーに難を避くるもの多かりしかば、ペトラルカは就てギリシア語を學び、ボッカッチオはレオンチウス・ピラツスをしてセッサロニカを去り、來りてフロレンスにホーマーを主題として講演を開かしめき。越へて十四世紀の末に至りエムマヌエル・クリソロラスも亦フロレンスに赴きギリシア文學を講じ、ベッサリオ、セオドル・オブ・ガザ等も亦之に倣ひ、コンスタンチノープル陷落後に於ても猶ラスカリス、ムスルス等西行しローマ法王ネープルス王、ミランのメヂチー家の歡迎優待を受けたり。是等の風潮は漸次他國にも流入し、フランスのチャールス五世は古學を研究し一四五六年ヂフエルナスはパリーに赴きてギリシア語にて講義を開きぬ。而して學問の淵源たる大學の狀態如何と云ふに、ドイツの大學は概ね十四、五世紀に設立されたり。即ちプラーグ(一三四八)ヴエンナ(一三八六)エルフルト(一三九二)は十四世紀に、ヴユールツブルグ、ライプチッヒ、インゴールシュタット等は一四〇〇年以後續々創設せられ、ルドルフ・アグリコーラ、コンラッド・ウアイッセル、ジオン・ロイヒリン等の如き碩學之を監督しぬ。イングランドに於ても亦ウインチエスター、イートン等の如き大學中古學研究の氣焰熾に起り、ラヂン詩學の講義あり。スペインにてもアイアラの大學はリヴイの歷史を研究飜譯し、ジオン・ヅ・メナはオヴイッド等の著に就て作詩法を研究せり。

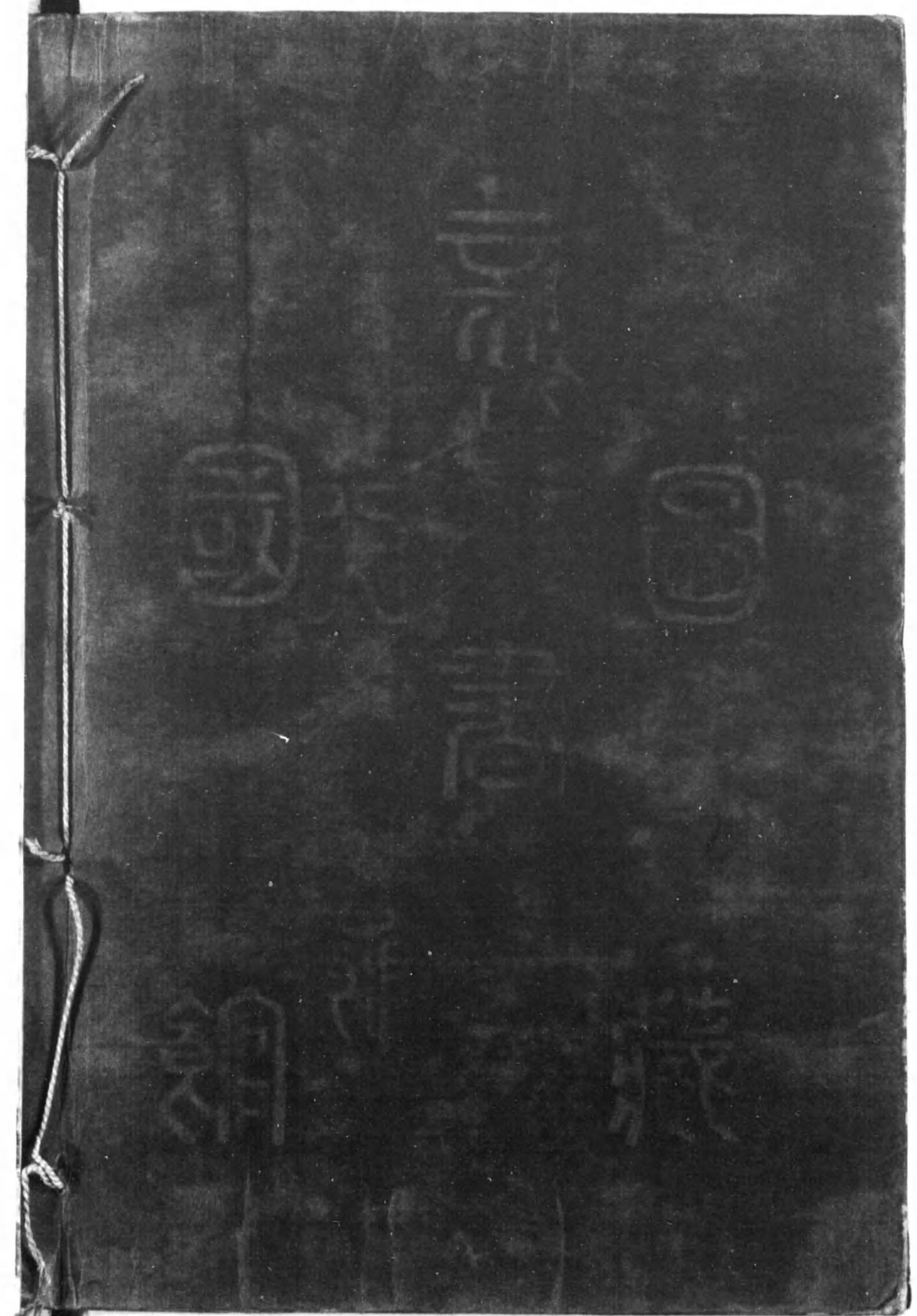
印刷、彫刻、油繪火藥製造の諸術

中古印刷術の未だ開けざる頃は堂々たる帝王、諸大學の文庫と雖ども其の藏書極めて稀少にして、藏書の饒多を以て名あるオックスフォード、ハイデルベルグの二大學フランス王サン・ルイの文庫すら一千部を超ゆる能はざりき。其他推して知る可きなり。而るに十五世紀の中葉マインツの人、フユールスト、セッフエル、グーテンベルグ等偶然一種の印刷器械を

發明し從來の方法よりも短時の間に迅速無限の印刷量を得べき方法を世に示せり。オランダ人は此の可動型印刷法發明の功を以て其の國人ハーレムの人コスターに歸すと雖も、其實グーテンベルグ及び同人の効績なることは万口の一致する處又疑ふ可きに非ず。此の器械を以て印刷したる出版物の始めて世に現はれたるは、實に一四五〇年より一四五五年迄の間に、マインツにて「マザレン・バイブル」の稱ある「ウルガタ」の印刷なり。降て十五世紀の末期には幸にして壞滅を免れたる古典は悉く出版の榮を得たりき。一四五二年の頃フロレンスの人フィニゲルラなるもの金屬を彫して繪畫を寫す術を發明し、續て酸を用ゐて彫琢する方法も亦發明せられぬ。是より先き一四一一年の頃ヴァン・エックは一三二八年既に世に知られたる乾燥油をゲント滯在中に描きたる繪畫に應用し繪畫術革命の基を開きたり。戰術も亦火藥の發明と共に全く一變せしが、サラセン人一二四九年頃之を發明しヨーロッパに傳へたるものゝ如く、而して大砲は十四世紀の初期既に發明せられしも其の種類は主に臼砲なりき。イングランドのエドワード三世は始めて之をクレシーの役に用ゐたるものゝ如く、チオッヂアの戰には確に其の効果の凡ならざるを示しき。フランス人は更に其の砲兵に大改良を加へイングランド人を制し得たり。而して手銃の發明は降りて十五世紀の初期なりしが如し。歩兵はローマ時代に頗る重んぜられしも其後其の價値漸く衰へしが、スイスの槍兵がオーストリア人を破りし以來其の効果頗る世人の尊重を買ふに至れり。要之平民出身の槍兵と銃手は善く貴族及び武士出身の騎兵を制せしより戰場に出でゝは何人も同一の價値を有し、專制王國中央集權の制度は万人をして法律の前に同等の權を得せしめ、印刷術の新發明は智識の平等を起すの基を成せり。

西洋中世史後編 終

62
400

子預分「地世八二
10/38

終